



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	石川明人『戦場の宗教、軍人の信仰』（八千代出版、二〇一三年）
Author(s)	堀，雅彦
Citation	基督教學， 49， 28-34
Issue Date	2014-10-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62435
Type	other
File Information	04hori.pdf



対して、大学と教会がそれぞれの様な形で影響を与えていったかという問題である。④「キリスト教学」という概念は、いまだ生産的に展開されるに至っていないが、「今日の状況を考えると、ここにまさに新しい可能性が含まれていると思われる」(二一・二四一―二)。

第二章「宗教論の曲がり角」において著者は、『岩波講座宗教(全一〇巻)』(岩波書店、二〇〇三年―二〇〇四年)をとりあげ、「その内容を総合的視点から批判的に論評する」(二二・二六二)ことによって、本書で展開した宗教文化論の自己理解を試みる。

人類が長きにわたり歴史と社会の現実の中で経験してきた宗教的・文化的営みは、「宗教」という概念の中に閉じ込めることはできない。自己の属する宗教集団に限定されることがらでもない。目を上げて見渡せば、その水平は果てしなく拡がっている。しかし、そもそも見渡すということが、なかなか容易ではない。本書は、もつと自己の視界を広げるとともに、地平に向かって現実に進んでいくことを願う者にとって、よき案内書・案内人となるであろう。

石川明人

『戦場の宗教、軍人の信仰』 (八千代出版、二〇一三年)

堀 雅彦

「軍人もまた平和を祈る」。この端的な事実を著者は一貫して見据え、祈りの主体としての軍人、あるいは祈りの場としての戦場のありようを、そこに含まれる矛盾や逆説とともに描き出そうとしている。⁽¹⁾ 著者の示唆するところ、私たちの暮らす現代社会はほぼ例外なく、何ほどか戦場であり、軍人ならざる私たち自身もまた、「何らかの形で戦争や軍事に関わっている」ことに変わりはない。⁽²⁾ この事情を了解するとき、本書の論考は極めて射程の広いものとして受け取れるだろう。

本書は主に五つの章からなる。

第一章 文化としての宗教と軍事

―軍隊の中の聖職者たち

第二章 信仰と国防の間

―日本軍と自衛隊の中のキリスト教

第三章 軍人にとつての戦争と信仰

―非戦論と軍人へのシンパシー

第四章 特攻の死と信仰

―クリスチャンの特攻隊員

第五章 戦争体験を咀嚼する信仰

―戦艦大和からキリスト教へ

第一章では、アメリカ軍の従軍チャブレン制度の歴史と現状が論じられる。独立戦争や南北戦争、ベトナム戦争など、アメリカ史そのものを大きく左右した戦争において、チャブレンの役割や派遣の規模、組織形態が当時の社会状況とあいまってどのように変容を遂げてきたかが、要所をおさえて論じられている。また、現在の陸軍ウェブサイトに見るチャブレンたちの横顔から、彼らに求められている資質や理想の一貫性を見出すと同時に、

その経歴の多様性に現代アメリカの多文化状況の反映を見ている。

第二章では、まず日本における近代軍隊の形成とともに進められた軍内部でのキリスト教伝道、すなわち「軍人伝道」の歴史が、エステラ・フィンチ（星田光代）らによって設立された「陸海軍人伝道義会」や、利岡中和らの「コルネリオ会」といった組織の由来や活動の歩みを軸に論じられている。後半ではそれらの組織の後継と目される自衛隊内のコルネリオ会の現状に注目し、そこに「現代日本で信仰を持ちながら軍事に携わる者たちの葛藤」の一例を見出している。彼らの「葛藤」の原因は主に、「一般のキリスト教会や牧師たち」の自衛官キリスト教徒に対する無理解だと著者は言う。特に日本基督教団の「戦責告白」（一九六七年）以降、その影響もあいまって、彼らに対する「教会や聖職者の視線が不寛容で冷淡なものになりがちであった」ことを著者は指摘し、この問題を象徴する出来事を、あるコルネリオ会員のエッセーをめぐって巻き起こった一連の論争に見ている。

続く第三章は、内村鑑三の軍人観についての論考であ

る。日清戦争直後から公にされるようになった内村の非戦論は、第一次世界大戦の開戦を境に、「人間の努力や道徳性」を重んじたものからキリスト再臨信仰に基づく「より宗教色の強い非戦論」へと、その性質を転じたという。他方、その内村が軍人に対して示した態度は総じて「大変温かいものであった」ことに著者は注目する。本章の末尾近くに「もし彼〔内村〕が二十世紀後半の自衛官キリスト教徒に対する一部の牧師たちの冷淡な態度を見たらどのように考えたであろうか」、とあることからわかるとおり、軍人に対する内村の温かさへの著者の評価は、前章における議論、すなわち今日の自衛隊員に対する「一部の牧師たち」の冷淡さへの批判と呼応している。

第四章は、特攻隊員として戦死を遂げた一人のクリスチャン青年、林市造の手記をもとに、彼が「極限状況の中で死と信仰をどう考えたのか」に迫るものである。この種の戦没学徒の手記が、平和の尊さや戦争の悲惨を訴える戦後の理念との整合性を優先するあまり、歴史資料として十分に丁寧な扱いを受けてこなかったことを著者

は指摘し、ここでは可能なかぎり市造の言葉そのものに寄り添おうとしている。

第五章では、戦艦大和による特攻作戦から奇跡的に生還した吉田満が、戦後、『戦艦大和ノ最期』等の著作を世に問いつつ、新たに導かれた信仰のもとに自らの戦争体験を捉えなおしていく姿が辿られている。いわば「軍人の信仰」ならぬ「元・軍人の信仰」が扱われる点では、本書においていささか特異な視点に立つものと言えよう。しかしながら吉田にとって、戦争は現在から絶縁された過去にとどまるものではない。彼の思索はなお、戦争の現実の外からではなく、その内側から、「戦後」的思考の自明性を問い直している。彼の思索と向き合うことを通して、著者は改めて、戦争と宗教の問題を（いま、ここ）の問題として捉えなおそうとしているものと見える。

以上の概観を通して改めて印象的なのは、著者が愛や平和といった理念の源泉としての宗教の側から戦争を論じるのではなく、むしろ「戦場」の現実や、その只中に身を投じる「軍人」の側から宗教を論じる姿勢を一貫して選び取っていることである。このことによって、本書

は宗教と軍事のいずれに多くの関心を注ぐ者にとつても新たな視野をもたらす書物となりえている。各章における論述には、戦争や軍事の詳細に通じる著者ならではの考察とともに、自衛官を含む広義の軍人の心情への率直な共感を呼び起こすところもあり、それぞれに興味深い内容になっている。

他方、気になるのは、随所に見られる「情緒的」平和主義への批判が著者の論調を強く規定し、諸々のテキストとの十全な対話を妨げている部分が見受けられることである。この問題が最も顕著と思えるのは第三章で扱われる内村、および第五章で扱われる吉田のテキストに対する扱いである。それぞれについて、簡単に疑問を記す。著者は内村に関しては彼の軍人に対する態度のみを扱う、としているが、実際にはその限定を踏み越えている。たとえば、著者は内村が戦争は人の手によらず神の手によってのみ止む、と主張した点にも注目し、これを高く評価している。著者も述べるとおり、これが内村なりのキリスト再臨信仰にもとづく主張であることは言うまでもない。著者の目には、この議論が戦争への反対に実際

的な効果を求めることをきっぱりと退ける点で、いつも好ましいものと映っているようである。

しかしながら、本書における引用からは漏れているものの、内村は右の主張に続く部分で、「非戦の唱導は主の降臨を早める」とも述べている。^③このように著者が引用に含めていない部分もあわせて内村の論説を素直に読むならば、ここで内村が敵としているものが著者の言う「情緒的」平和主義よりもむしろ、「平和の主なるイエスキリストの言を引き来つて戦争を弁護するがとき」教会内の勢力であることは明白である（あるいはその両方かもしれないが、力点は明らかに後者への批判にある）。端的に言えば、神に祈るべきは戦争における勝利ではなく、戦争の廃止だということである。引用が著者自身の論旨との兼ね合いで限定を受けるのは当然だが、内村と著者のそれぞれが行っている闘いの内実は、かなり異なっているように思う。

他方、「単に戦争の害悪を強調し、戦争憎悪をかきたてるだけの反戦論」に対して吉田が抱いている違和感はおそらく著者自身の抱いているものと寸分たがわず一致

していよう。しかしながら、著者が自己の見解との整合を求めるあまり、吉田自身の思索の内実を捉え損ねているように見える部分もある。¹⁾

たとえば、著者は吉田が「ルカによる福音書」三章一〇節の読み込みから、「何をするか」に答える前に、背伸びせずに自分が「何であるか」を問い直すこと、その意味で「分をわきまえる」ことの大切さに思い至った、に、深い感銘を受けている。そしてここに、吉田がかつて述べた「無国籍市民」ではなくあくまで「日本人」の立場から平和を考えようとする「姿勢との符合を見えて」とる。

しかし、吉田にとって自分が「何であるか」の問いが、著者の言う「日本人としてのアイデンティティ」の確認によって尽くされる問題だとは、いささか考えにくい。実際、著者も引くとおり、吉田は自らが日本人であると同時に、「キリスト者」であること、また「戦中派の生き残り」であること、「体制側」に属して戦後復興のために働いてきたこと、等々を記している。これはいわば、吉田自身の固有のライフヒストリーに関わる重層的なア

イデンティティの表出であり、ある種の罪の告白にも似た痛みをとまなうものでもあろう。その痛みあればこそ、彼は（以下、やはり本書の引用からは漏れる部分となるが）国家が平和に反するような道を歩みだしたときには「自分がなしうる限りをつくし」、その歩みを「正しくするための努力を払うべきなのだ」とも論じているのではないか。²⁾つまり吉田の語りには自らが日本人として、またキリスト者として、「なしうる限り」をつくしえたか、というきびしい自問の刃が隠されていると評者には思える。しかしながら著者による引用と解説に、このような自問を読み取ることは難しい。実際、著者自身の吉田への共感とは、むしろ「分をわきまえる」という彼の語り口と、「国家という枠組み」を重視する「常識的なリアリズム」（これは吉田ではなく、著者の言葉である）に向けられているようである。評者が吉田自身の言葉から受ける印象と、それを受けた著者の言葉から受ける印象は、あまりに隔たつていと言わざるをえない。

内村と吉田のテキストを読み解く著者自身の語り口の随所に見えるのは、ある種の平和主義への異議とともに、

「分をわきまえ」、与えられた職分と黙々と一体化する氣質への率直な共感、ないし親愛の情とも言うべきものである。著者にとってその種の氣質はおそらく、広義の軍人にこそ多くの事例を見出せるものだろう。その意味での軍人的氣質への親愛は、戦争を一種の天災とみなす内村の議論への賛意とあいまって、(著者の意図をこえて誇張した表現になるかもしれないが)戦争は罪だが、軍人に罪はない、という素朴な前提を著者のうちにもたらしめているように見える。^⑥

もちろん、著者が第三章で論じるとおり、戦争を憎むあまり、軍人の人格そのものを軽んじるような言動を妥当化することは難しい。しかし、軍人に罪なし、との論調を(軍人自身の意識を飛び越えて)強める結果、軍人が職分として背負わざるをえない罪の問題、外的な糾弾や擁護の是非以前に軍人自身をさいなむ罪責感への視座が十分に深められていないことは残念に思う。軍人への態度において著者が賛意を示す内村にせよ、軍人に罪なきがゆえに、というよりもむしろ、彼らがまさに軍人として背負う罪を、自らもまた戦争を止めることのできな

かつた者として、背負わんとするがゆえに、彼らを温かく遇したのではなかったか。

戦後の日本社会に根強い「情緒的」平和主義の諸前提を突き崩し、戦争と宗教とともに矛盾をはらんだ人間の営みとして捉えなおそうとする著者の試みを、評者もまた、勇気ある挑戦と受けとめたい。^⑦しかしながら、諸々のテキストとの対話が自説の補強に傾き、自己相対化の契機を欠いたものとなるならば、その勇気もまた、一個のかたくなな情緒へと転じてしまうことだろう。著者の考察が今後、本書への賛否両方の情緒的反応にまどわされることなく、いつその知的誠実と結ばれ、さらなる実りをもたらすことを願わずにはいられない。

注

(一) 帯に付された社会学者・橋爪大三郎氏の推薦文を以下に引く。「戦争は生き死にの極限、宗教は生き死にの真実。

自らの生き死にを究めるとき、ひとは本当に生きる——戦争と宗教とを両輪に未踏のテーマにいどむ、勇気ある

挑戦の書だ」。

- (2) 著者は前作においてこれを「戦争の世俗化」と呼び、簡潔な解説を加えている。「世俗化した戦争においては、戦時と平時の区別が不明確になり、大きな衝突が起きにくいという意味では常に平和であるように見える。ただしその代わりに、小規模な衝突やテロの不安は常に残り、金融、インフラ、あるいはサイバー空間など、一般市民の社会生活が、常にぼんやりとしたゆるい戦場のようになっていく」(『戦争は人間的な営みである』並木書房、一三四頁)。本書七九頁にも、呼応する若干の叙述がある。

- (3) 「戦争廃止に関する聖書の明示」、『内村鑑三集』筑摩書房、二六八頁。

- (4) もっとも、評者は本書によって初めて吉田満という著述家を知ったにすぎない。以下は本書の引用元をたどりつつ、いくつかの作品を読んだ限りでの私見である。

- (5) 「戦中派の求める平和」、『吉田満著作集』下巻、六二三頁。

- (6) 与えられた職分と黙々と一体化する気質が、ともするとハンナ・アーレントがナチスの戦犯アイヒマンのうちに認めた「凡庸な悪」と結びつく可能性についても考えた

- い(昨年末、日本でも関心を集めたマルガレーテ・フォン・トロツタ監督による映画「ハンナ・アーレント」は、この問題に照準を合わせた力作であった)。近現代の軍隊が一種の官僚制のもとに組織化されていることを考え合わせるなら(北岡伸一『官僚制としての日本陸軍』)、この種の気質が「作られる」側面にも目を向けるべきだろう。
- (7) 注(1)に記した橋爪氏の評言の他、星野博美氏(ノンフィクション作家・写真家)もまた、本書を「勇気ある提言」の書と評している(読売新聞、十二月九日)。